学力向上フロンティアスクール　中間報告書

都道府県名	長崎県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年度４月現在）

学校名	壱岐郡芦辺町立　田河中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	２	２	０	６	１７
生徒数	４６	４５	４８	０	１３９	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

確かな学力を持ち，たくましく生きる生徒の育成
〜 基礎・基本の定着を目指す授業の工夫を通して 〜

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

○実施学年　全学年
○教　　科　国語，英語，数学の３教科を中心に
○その理由　・生徒の理解度に差が出やすい。
・教科担当教員が複数いるためＴＴ授業や習熟度別学習を行いやすい。
・他教科の学習の基礎となる部分が多く存在する教科である。

(2)　年次ごとの計画

平成14年度

○研究副主題（テーマ）

〜 個に応じた授業の工夫を通して 〜

○仮説

個に応じた指導のための教材の開発や，指導方法・指導体制の工夫改善を行ったり評価を生かし指導方法を改善していくことによって，生徒は自ら考え解決していこうとする力を育むことができるであろう

○研究内容・方法

＜研究内容＞
・基礎・基本の徹底を図り「確かな学力」の向上を目指す
・個に応じた教材の開発や指導方法の工夫
・各教科における基礎・基本と評価の工夫
・評価の在り方と評価を生かした指導の改善
・指導案の書き方や授業研究の持ち方の改善
・選択教科の在り方や実践の工夫
・時間の弾力的運用や授業外時間の指導

＜研究方法＞
・研究推進委員会を中心に全員で研究を深める。
・授業研究，体験的・問題解決的学習を積極的に進め一人１回研究授業を行う。
・研究の領域は各教科・道徳・特活・選択教科について行う。
・授業仮説は研究主題・副主題・研究仮説に基づき，各教科の特色を生かした教科仮説を設定する。
・同和教育，平和教育の研修を進める。
・パソコン研修（スキル学習，ホームページ作成，プレゼンテーション）を深める。
・文献研究や先進校視察などを行い，「学力向上フロンティアスクール」の３年間の研究の骨子をつくる。研究組織や研究仮説も必要に応じて変えていく。

平成15年度	○研究副主題（テーマ） 〜 基礎・基本の定着を目指す授業の工夫を通して 〜 ○仮説 **基礎・基本の定着を目指し，** ①　教材の開発や ②　指導方法・指導体制の工夫改善を行ったり ③　評価を生かし指導方法を改善していくことによって， 生徒は自ら考え解決していこうとする力を育むことができるであろう ○研究内容・方法 ＜研究内容＞ ①教材の開発 ・必修教科で使う学習プリント，まとめのプリント ・習熟度別学習のプリント ・単元のまとめ使うマスタシート ②指導方法・指導体制の工夫改善 ・ＴＴ指導 ・習熟度別学習 ③評価を生かした指導方法の改善 ・指導と評価の一体化（１時間ごとの評価基準表の作成） ・授業改善アンケート ・到達度評価テスト ＜研究方法＞ 本年度は「必修教科の授業改善」を研究の主眼としており，「学期に１回以上の研究授業」を目標に，実際の授業及び授業研究で研修を深めていきたいと考えている。授業改善に関しては，教師だけの意見によるものでなく，生徒や保護者などから幅広く意見を求めていきたい。そしてその意見を，研究部会や教科部会などを数多く行う中で，分析し，今後の具体策を検討し改善に努めていく。 それ以外の研究活動も同様に，計画(Plan)→実施(Do)→評価(Check)→更新(Action)のサイクルをこまめに行い，全職員で共通理解を図りながら進めていく。

平成16年度	○研究主題 ○仮説 ○研究内容・方法

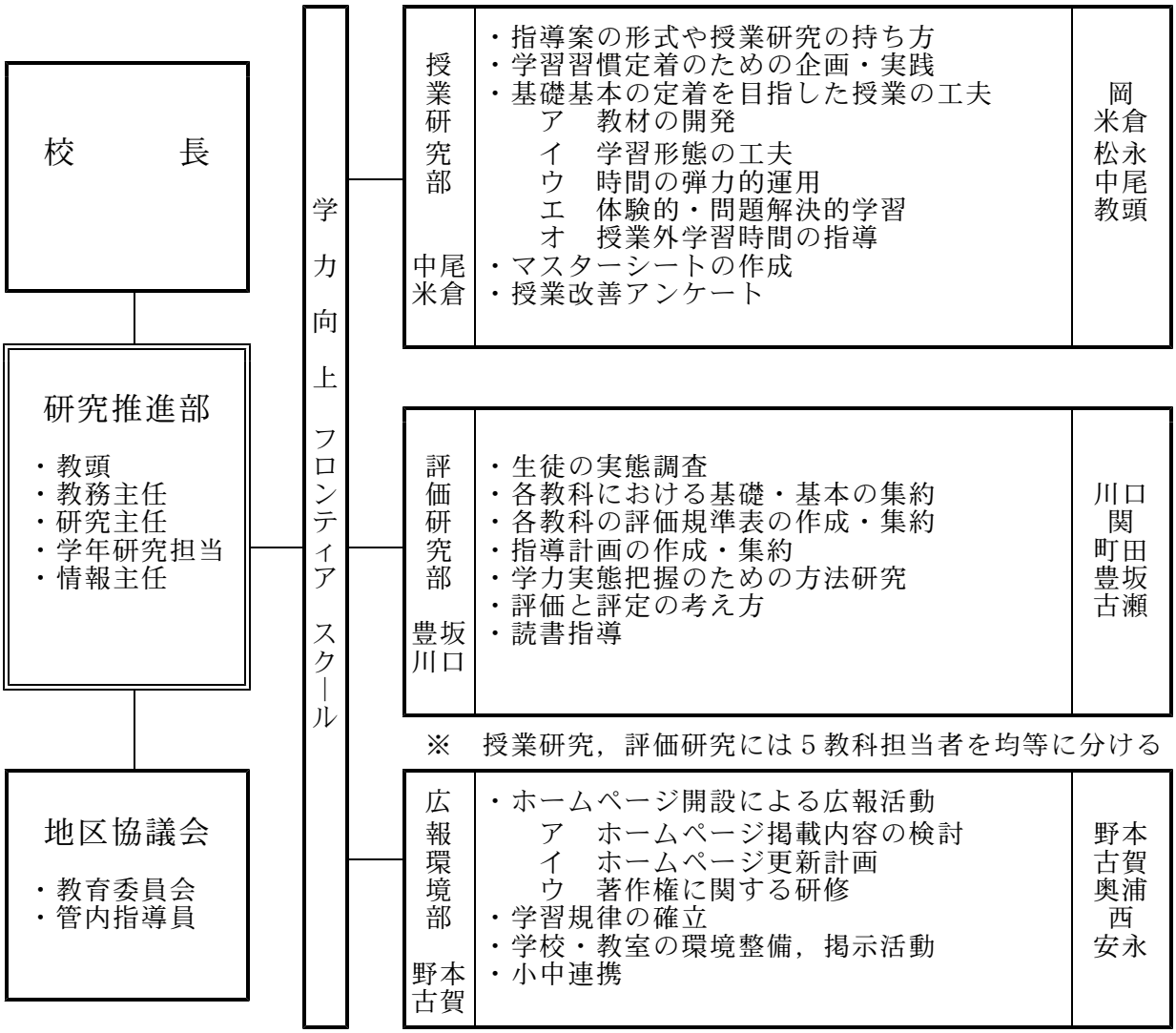
※　１６年度は現在検討中で，年度終了時に研究仮説等を含めて全て見直しを行っていく。

(3)　研究推進体制

昨年度までの研究組織は，研究推進部の下に４つの研究部（①各教科②授業研究部③評価研究部④総合学習）をおいていたが，研究内容を絞り込むため，①各教科と④総合学習を廃止し，新たに広報環境部を設置した。総合的な学習等の発展的学習は前年度を継承する形で研究の対象から外し，また，各教科は組織として活動することは少ないため，授業研究部や評価研究部の下部組織として活動させていく。新たに設けた広報環境部は，フロンティア事業の意味合いから，本校の研究内容普及のためのホームページ開設や，小中連携，学校・教室の環境整備の必要性から新たに設けることなった。

１４年度		１５年度
①　各教科 ②　授業研究部 ③　評価研究部 ④　学年部(総合学習)	⇨	①　授業研究部 ②　評価研究部 ③　広報環境部

１５年度の研究組織



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果と今後の課題

対外的なテストなどを受けていないため客観的なデータを示すことができないが，本年度本校で取り組んだことで成果と課題について３項目記述したい。

①　必修教科の取り組みと授業改善

毎日の教育活動の中で一番大切なことは，１時間１時間の授業である。１時間の授業の中で如何に生徒たちに，その教科の基礎・基本や学び方を身に付けさせ，さらに自ら解決していく能力等を育成していくかが，私たちの課題である。本年度の研究も，このことを中心に進めているが，それぞれの教科の特性から，全ての教科で共通した取り組みを行うことは難しい面もある。そこで次のような視点を持って，日々の授業を進めていくよう共通理解を図っている。

基礎・基本の定着

「基礎・基本」の本校の定義については先ほど述べたが，昨年度より，各教科等で話し合いの場を持ち，「その教科の基礎・基本とは何か」，また，「基礎・基本を定着させるための学習方法はどうあるべきか」等々審議を重ねてきた。その中で，全教科で共通して取り組むこととして，１時間の授業の中で小テスト・フラッシュカード・１問１答問題等で既習事項・重要事項の定着を図ることとした。しかし，それ以外にもその教科の学習を支える教科特有の技能や学習習慣・学習規律等がある。これらは，日々の授業の中で教師が意識して身に付けさせていくよう心がけている。

主体的に参加する授業

「主体的」とは生徒が自らの意志・判断を持って授業に取り組む姿であるから，基礎・基本がしっかりと身に付いていることが大前提となる。そのために，上記の「基礎・基本の定着」を一番目の重点事項としているが，次に「わかった」「できた」等の体験からくる「学ぶことの喜び」「次の学習への意欲」もとても大切なものである。そのために次のような手立てを心がけている。

ア　生徒の興味を持たせる導入の工夫
イ　生徒の能力に応じた適切な問題の設定
ウ　ドリル・練習問題等で理解度の把握やわかるまでの反復練習
エ　体験活動・操作活動を取り入れる

学期に１回の研究授業

昨年度までの研究は，教育課程の編成や選択教科の取り組み等，主に必修教科以外の外堀を埋めることに重点が置かれていた。しかし，本年度は「基礎・基本の定着のために如何に必修教科の授業を行っていくか」を研究の中心としている。そのために，それぞれが学期に１回以上の研究授業を行うことを目標としている。また，月に１回程度の授業の公開を行い，地区内の小中学校や保護者に呼びかけて，アンケート用紙などで参観した授業について意見がもらえるようにしている。学校行事や様々な諸活動に追われる毎日で，教材研究を行い，指導案を書いて，研究授業を行うことは決して楽なことではない。しかし，授業研究によって教師自身の指導力が少しでも向上し，また向上しなくてもそうした姿を生徒に見せることで，教師にも生徒にも少なからぬ影響があると信じている。

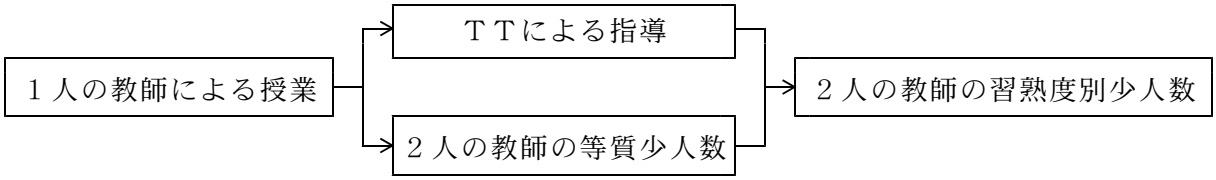
授業改善アンケート

これからの学校は，保護者や地域の要望を踏まえた使命・存在意義を明確にし，学校の教育目標や方針を示し，その説明責任・結果責任を果たすことが求められている。そのためには，計画（Plan）→実施（Do）→評価（Check）→更新（Action）の循環を行うような，組織マネジメントの手法が取り入れられることが望まれている。そのために「学校評価」や「評議員制度」を導入した学校は多いはずである。これまでも，学校ではＰ・Ｄ・Ｃ・Ａを行ってこなかったわけではないが，ともすると目標が明確でなかったり，その評価が生かされていなかったり，或いは保護者や地域にその結果が公開されていなかったりと，十分に機能していなかったことは否めない。また，授業改善においては，「評価を生かした指導の工夫・改善」が叫ばれており，生徒の側から私たち教師の授業を評価してもらい，それを今後の授業に生かしていこうと考えたのが授業改善アンケートである。このアンケートは，昨年度は２学期末に１回実施しただけだったが，本年度は１学期末，２学期末の２回実施した。アンケート実施後，休業中（夏季及び冬季）に結果の分析を行い，教科部会などで次学期の取り組みを検討し，次の学期に生徒に返していくという流れをとっている。このアンケートの導入にあたっては，「生徒の評価は，教師の誹謗や中傷になるのでは」という心配もあったが，決してそのようなことはなく，私たちの努力している部分は正当に評価し，改善を要する部分をきちんと指摘していた。校内外の研究授業を行う中で，折角準備した授業に対して，当たり障りのない意見や世辞だけで終わり，物足りなさを感じた教師も多いはずである。日々の授業を受けている生徒だけに，その意見には数多くの示唆があると確信している。

また，授業だけでなく，印象や感想で評価と反省を行っていた今までの学校評価活動を見直し，本校の教育活動全般において，きちんとした評価活動を行っていくことの必要性を感じている。

指導方法・指導体制の工夫・改善

本校では，国語・数学・社会の３教科においてＴＴ指導を行っており，国語・社会においては１週間のうち数時間だけで，数学だけが全時間ＴＴとなっている。どの教科においてもＴＴ指導によって下位の生徒への対応はとりやすくなったことが利点としてあげられるが，ＴＴの指導形態の工夫に難しさを感じている。数学などでは学力差が大きいため授業の始めから下位の生徒への指導を行えるが，社会や国語においてはＴ２の役割分担を明確にできないでいる。個に応じることを考えれば，１つのクラスを授業するとして



という図式が成り立つであろう。教員の配属や校舎の物理的な問題など課題は多いが，本校でも今後こういった流れで，指導体制を変えていくことを検討していきたい。しかし，例え少人数に分けたからといって，それぞれの教師の授業技術が低ければ本末転倒である。

②　選択教科の取り組み

本年度の研究は必修教科を中心に進めているが，必修教科の中だけで，全てのことを生徒に身に付けさせることができないのも現実である。新学習指導要領では，生徒のつまずきに対して，定着するまで繰り返し指導することや，学習指導要領の基準性(最低基準)から，教科書の内容を超えた，発展的な学習内容も指導していくことも求められている。しかし，時数的な問題もあり，必修教科の中では指導しきれない部分も多い。したがって本校では，必修教科をサポートする形で次のような選択教科を行っている。

＜興味・関心に基づく発展的選択教科＞

○選択Ａ１(体・家・社・理)　　興味関心をもとに課題追究や発展的な学習を行う
○選択Ａ２(音・技・国・数)　　Ａ１の授業は1.5～２時間単位

＜基礎・基本の徹底を図る補充的選択教科＞

○選択Ｂ１(国・英・数)　　→月火水の４時間目に25分間のドリル学習
○選択Ｂ２(国・数・社・理・英)→学期末・学年末に行う詰めの授業

選択Ａ１・Ａ２の方は，従来行われていた選択教科と考えていいが，Ａ１の(体・家・社・理)は1.5時間もしくは２時間単位で隔週で行い，実験・実技等の時間がしっかりと確保できるようにしている。また，選択Ｂ１については昨年度から実施しており，国語・英語・数学の３教科に絞って，１年間に合計３０時間,習熟度別の３クラス(基礎・練習・発展)を編成しドリル学習を行っている。短時間で集中して効果的な復習ができることから，生徒からの要望も強く，昨年度と比較して総時間数を２０時間から３０時間に延ばし，コースも増設(国語・英語は昨年まで２コース)し，きめ細かな指導ができるように改善している。１年間の取り組みによって，生徒の学力が伸びたかどうかは，データとして把握しにくい部分が多いが，２学期末に実施した生徒のアンケートからは，７割の生徒が自分の力が伸びたと感じ，８割の生徒がＢ１の授業を必要だと感じている。また，各教科を免外の教員も含めて３人で指導するため，打合せの時間も確保し，その日の１～３校時の中に位置づけ，４時間目にＢ１を実施している。学習する内容に関しては，数学や英語は前学年の内容を単元ごとに復習していく形をとっており，国語に関しては，昨年度は漢字，視写，詩の暗唱などを行い，今年度は漢字検定等にも取り組んでいる。

③　その他の取り組み

マスターシートと自学帳

授業改善アンケートに記述される内容は，授業に関することがほとんどだが，要望として，「テスト勉強に使えるまとめのプリントのようなものがほしい」という意見も多かった。そこで自習時間や家庭学習，また授業の中でも使える単元のまとめのプリントを“マスターシート”と名付け，五教科においてプリントを作成した。教師の方からプリントを配布して授業で使うこともあるが，生徒自身がほしいときに自由に取って学習できるよう，プリントを入れたケースを各学年のフロアーに設置した。３学年とも全教科完成したわけではなく，まだまだ不備な点も多いのだが，２学期末テストに際して，７割の生徒がテスト勉強に活用しており，「早く全教科そろえてほしい」とか，「学習のポイントが分かり学習に役立った」等の声が多かった。最近では塾に通う生徒が増えてきたが，家庭学習の習慣が身に付いていない生徒や，勉強の仕方が分からないという生徒が多いのが実情で，そういった生徒には大変効果的だといえる。マスターシートの作成には，問題の厳選から解答まで多大な時間を要するが，１日も早い完成を目指したい。

また，今年度より中間テストを廃止したため，保護者から生徒の学力低下を心配する声が上がった。そのため，家庭学習の充実を図る必要を感じ，取り組みを強化したのが「自学帳」である。昨年までも生徒会の専門部を中心に取り組んではいたが，本年度は学級の学習部や担任が中心となって取り組み，提出率はアップしている。月２回の部活動停止日を設け，放課後の個別指導の時間を確保したり，休業中の補習授業等を行ったのも同様の趣旨である。しかし，こういった教師の関わりを大切にしていきたいと思う反面，ドリル学習のプリントやマスターシート等の作成，個別指導には多大な労力を使うので，加重負担にならないよう常に教育活動全般の見直し，精選を意識していきたいと考えている。

Ⅳ．学力把握のための学校としての取組

１．到達度評価テスト
　校内で作成したテストで，１年間の学力の定着度を測り，本年度の反省・次年度の取り組みの資料としている。テストの内容は１年間の全範囲とし，教科書のレベルで問題を作成し，各教科７５分間で実施している。

実施時期	４　　月	３　　月
１　　年	小６の国語・算数	中１の国・英・数・理・社
２　　年		中２の国・英・数・理・社
３　　年		中３の国・英・数・理・社

※　また，理科・社会・英語などにおいて，学期始め実力テストの際に郡内の数校で統一した問題でテストを行い，他校との比較しながら自校の力を測っている。

２．選択Ｂ１評価テスト
　本校では国語・数学・英語において，補充的選択教科として選択Ｂ１を実施しているが，そこで学習する基礎的・基本的内容がどの程度身に付いているかを把握するために各学期末に選択Ｂ１評価テストを実施している。これを基に各学期の生徒の評価を行うが，学期の取り組みの反省の資料ともなり，休業中に次学期の指導内容・指導方法についての検討資料ともなっている。

３．学習実態アンケート
　このアンケートは学校での授業への取り組みや，家庭での生活状況・学習状況，また，読書活動での取り組みを把握することを目的として行っている。アンケートの実施は１学期末と２学期末で，変容を見，各教科や学級活動でも指導のための資料としている。

Ⅴ．フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１．研究会
○第１回　フロンティア事業研究会（中間指導）
・日　時　平成１５年６月２４日(火)
・場　所　芦辺町立田河中学校
・テーマ　「授業研究とこれからの研究の方向性」
・対　象　田河中学校職員及び校区内の小学校
○第２回　フロンティア事業研究会（中間発表）
・日　時　平成１５年１１月２７日(木)
・場　所　芦辺町立田河中学校
・テーマ　「授業研究と２年次の研究の進め方について」
・対　象　田河中学校職員及び郡内小中学校教員
○第３回　フロンティア事業研究会
・日　時　平成１６年２月２５日(水)
・場　所　芦辺町立田河中学校
・テーマ　「基礎・基本定着の授業の流れと授業研究の持ち方」
・対　象　田河中学校職員

２．フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動
○平成１５年度　中学校教育課程研究協議会
・日　時　平成１５年８月５日(火)
・場　所　芦辺町クォリティーライフセンター「つばさ」
・テーマ　「確かな学力を身につけるための取り組みについて」
・対　象　郡内協議会受講者(郡内校長・教頭及び教職員)
○中学校　１０年経験者研修
・日　時　平成１５年８月１１日(月)
・場　所　芦辺町クォリティーライフセンター「つばさ」
・テーマ　「確かな学力向上のための手立て」
・対　象　郡内１０年経験者
○定例校長研修会
・日　時　平成１５年９月２日(火)
・場　所　芦辺町総合福祉センター「つばさ」
・テーマ　「学力向上フロンティアスクールとしての取り組み」
・対　象　郡内校長

＜ホームページ＞
○ホームページはほぼ完成し，アップまで最終確認中である。

◇　次の項目ごとに，該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□ １５年度からの新規校　■ １４年度からの継続校

【学校規模】　□ ３学級以下　■ ４～６学級
□ ７～９学級　□ １０～１２学級
□ １３～１５学級　□ １６学級以上

【指導体制】　■ 少人数指導　■ Ｔ．Ｔによる指導
□ その他

【研究教科】　■ 国語　■ 社会　■ 数学　■ 理科
■ 外国語　□ 音楽　□ 美術　□ 技術・家庭
□ 保健体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■ 有　□ 無